第４節　等妙寺に伝わる什物について

１　調査の経緯と経過

等妙寺が所蔵する仏画や仏像等の什物については『宇和旧記』に目録が記載され、古くから注目されてきた。昭和 60 年３月発行の『広見町史』にその一部が掲載されている。平成９年に天台宗学研究所の研修で等妙寺を訪問した寺井良宣氏は、等妙寺の「絹本著色授戒本尊像図」について報告された〔寺井 1998〕。その後、史跡指定に向けた総合的な調査が平成 14 年度からスタートし、仏像については奈良国立博物館の岩田茂樹氏に調査を依頼、平成 15 年７月に等妙寺の旧本尊とされる木造菩薩遊戯坐像（伝如意輪観音）の調査が実施された。絹本著色如意輪観音像図については、愛媛県美術館学芸員の西田多江氏が注目し、平成 17 年に「愛媛県美術館研究紀要」にて作品紹介として報告された〔西田 2005〕。このほか、不動明王二童子像図や両界曼荼羅図など、平成 19 年発刊の報告書に掲載されている〔鬼北町教委 2007〕が、当時、網羅的な調査に及ぶところまでは行われず、専門家による詳細な調査が課題であった。

什物は仏像・仏画・工芸品・織物など多岐に及ぶうえ、仏教美術、仏教史学、宗教学なども含め、総合的な調査研究が必要とされる。また、平成 17 年の町村合併以来、等妙寺に限らず、町内の寺社に伝わる仏像等の文化財についても同様に調査が必要であったため、町の文化財保護業務の一環として継続的に調査を実施することとした。

仏像については、岩田茂樹氏に調査指導を依頼し、平成 25 年度から町内の仏神像を中心に調査を行った。平成の大合併による指定文化財の見直しは近隣の松野町・西予市・大洲市なども同じ時期に進められたので、各市町で調査日程を調整し、費用や調査の機材を負担し合うなどして実施した。また、仏画については、西田氏の調査以降進展を見ないままであったが、令和元年度に久保智康氏の紹介で京都国立博物館の大原嘉豊氏に調査を行っていただいた。また、仏教史学・考古学・仏教美術工芸など幅広い分野に精通した久保智康氏には、等妙寺旧境内調査・整備検討委員会委員として加わっていただき、各般にかかる指導・助力を頂くこととなった。本報告書第２分冊「第５章　附論」の久保論文にあるように、現地の発掘調査成果と合わせ、寺史についても新たな見解を生む事にも繋がっている。

これまでの什物調査の成果については、宗教法人等妙寺及び等妙寺総代会の全面的協力のもと、等妙寺開基 700 年を記念して開催した愛媛県歴史文化博物館共催テーマ展「奈良山等妙寺の至宝と国史跡等妙寺旧境内展」の図録にて報告するとともに、等妙寺の什物のほぼすべてを一般に展示公開する機会に繋がっている〔鬼北町教委 2020〕。等妙寺に伝わる什物類への理解は寺史を紐解く上で欠かせないため、これまでの調査で得られた成果についてまとめて報告することにしたい。

２　仏像の調査

（１）調査経過

調査日程等については以下のとおりである。また、調査ごとに調書を作成頂いた。

【平成 25 年度 (2013)】

調査日：平成 25 年８月 29 日　　調査場所：等妙寺

調査者：岩田茂樹（奈良国立博物館）、幡上（鬼北町教育委員会）

調査対象：

・等妙寺（大字芝）「木造菩薩坐像（伝如意輪観音）」（愛媛県指定）、「木造毘沙門天立像」（町指定）「木造不動明王立像」（町指定）

・等善寺（大字東仲）「木造如意輪観音坐像 」（町指定）

【平成 27 年度（2015）】

調査日：平成 27 年７月 30 日、平成 28 年２月 12 日　調査場所：各寺

調査者：岩田茂樹（奈良国立博物館）、幡上（鬼北町教育委員会）

調査対象：

・宝樹寺（大字柏田）「木造千手観音菩薩坐像」（町指定）

・善光寺（大字小松）「木造阿弥陀如来座像」（町指定）、「木造薬師如来座像」（町指定）

【平成 28 年度（2016）】

調査日：平成 28 年 12 月４日　　調査場所：各寺

調査者：岩田茂樹（奈良国立博物館）、幡上・織田（鬼北町教育委員会）

調査対象：

・龍淵寺（大字上川）「木造釈迦如来坐像」（町指定）、「木造釈迦如来坐像」（未指定）

・禅定寺（大字広見）「木造阿弥陀如来坐像」（町指定）

・観音寺（大字西野々）「木造千手観音立像」（町指定）

【平成 31 年 / 令和元年度（2019）】

調査日：令和元年９月 12 日　　調査場所：大洲市肱北公民館

調査者：岩田茂樹（奈良国立博物館）、幡上・織田（鬼北町教育委員会）

調査対象：等妙寺（大字芝）「木造僧形神坐像（十禅師権現像）」

（２）調査成果

①木造菩薩遊戯坐像（伝如意輪観音）　鎌倉前期・13 世紀前半　総高 89.0 ㎝、坐高 47.2 ㎝

本像は、岩田茂樹氏により広く紹介されている〔岩田 2015〕。カヤを薄く染めたかと見られる材を用い、内刳を施した寄木造で、目には玉眼を嵌める。表面は截金文様を施すが後補とみられ、当初は素地仕上げと推測される。像高 89.0 ㎝、周三尺の坐像である。巌上に左膝を立てて坐する遊戯坐と呼ばれる、きわめて中国的な形式とされるスタイルで、禅宗とともに流入した中国宋代の仏像の影響下にあるものである。本像の表情に似た作例として大報恩寺六観音中の如意輪観音像を挙げ、鎌倉時代の仏師肥後別当定慶に連なる慶派仏師の作と考えるべきもので、造像年代は形式の類似する大報恩寺・鞍馬寺・明導寺等の諸像に近い 13 世紀の第２四半期と推定されている。

磐座の修理銘　本像が坐する磐座に、正面中央とその上面に墨書による修理銘がある。

「再興修造応永三十四年未卯月廿五日　住持宗秀 / 本願静能 / 大檀那綱能」

「□為　十三日 / 始申日 / 終申日」

応永 34 年（1427）等妙寺住持宗秀のときに、静能の発願によって何らかの修造が行われたことを示す。その期間は 13 日間ということが判る。本像自体には大きな修理は認められないので、この時の修造は主に磐座に関するものと見られるが、本像表面の截金文様は後補で、本像の修理も幾分かは行われた可能性がある。願主となっている静能は、前住等妙寺で法勝寺第 21 世となった紹空上人で、正長２年（1429）に法勝寺在世が確認でき、細編十帖の一つ「円戒十六帖」の第七帖奥書にも等妙寺

図 3-25　現在の等妙寺観音堂（北西から）

宝暦５年（1755）再建の如意輪堂。厨子とともに町指定で、厨子は若干古く江戸初期とみられる。

図 3-26　観音堂内の様子

旧本尊は 60 年に一度の開帳の秘仏とされており、普段は厨子扉が閉められている。

図 3-27　磐座に坐す木造菩薩坐像（伝如意輪観音）

図 3-28　建立勧化帳にみる旧本尊の姿

東塔（前住）で法勝寺住持だった「静能和上」とある〔色井 1989、石野 2010〕。また、立花津（宇和島市吉田町）の 13 貫の寺領地の所有をめぐって歯長寺住持昌宗上人と法勝寺・等妙寺とが争い西園寺氏（「公廣」は後の書込み）が裁許した、享徳２年（1453）卯月八日の寄進状〔「歯長寺文書」〕に「本寺依長老紹空上人併住持慈範大徳訴訟」と名前が見える。紹空上人の等妙寺に対する支援はおよそ四半世紀に及んでおり、等妙寺の発展を支えた重要な人物だったことが判る。

建立勧化帳に描かれた旧本尊の姿

「等妙寺建立勧化帳」は、文政２年（1819）に等妙寺住職冷湛（36 世か）が、荒廃していた堂舎を再興しようと勧進活動をするために、等妙寺の由緒や再興の趣旨を版木刷りで創られたものである（図 3-28）。版木の所在は不明で、今は版本（写）のみ見ることができる。表紙裏には磐座に坐した本尊菩薩の姿が大きく描かれ、今は欠損して不明となっている左手に蓮の花を持つ姿が見える。

②木造毘沙門天立像　平安後期・11 世紀末～ 12 世紀初、像高 138.9 ㎝

本像は如意輪観音の左脇侍として配された像である。頭・体の幹部は、頭頂の宝珠を含め、木心を像背に外したヒノキ縦一材から彫成する。背面の襟首辺から裙裾に達する部分を背刳し、縦長の背板を当てる。邪鬼は岩座を含め大半一材製である。武装天部像としては動きが控えめで、表情にも激しさはなく、穏和な表現と評しうる。彫り口も総体に浅く、平安時代後期の作風が顕著である。幹部を一材から造るが､内刳を深く施して像の軽量化を図る点にも同時代の特徴が感じられる。その一方で、体躯の横幅は広めであり、動きや細部の彫りに鎌倉時代に近づくにつれて現れる写実性は見いだせない。制作年代は 11 世紀末頃から 12 世紀の初め頃と推測される。京都を中心とする中央の作とは異なり、この地方における制作である可能性を感じさせる。わずかな後補部を除き、像本体および邪鬼を表す台座（上半）は概ねオリジナルの材を残す。

なお、本像の両沓先は広葉樹材で造られ、その点、左脇侍の不動明王像に通ずる。不動明王像が三尊の一軀として追加された中世のある段階において、修補が行われたものかと推定される〔岩田 2013 調書より〕。

③木造不動明王立像　鎌倉後期～室町前期・14 世紀頃、像高 130.1 ㎝

像高は毘沙門天像にほぼ等しく、本像が制作された段階で毘沙門天像と一具としてまつることが企図されたと想像される。広葉樹材を用い、一木割矧造とする大きな木取りであり、この構造は中世以前にさかのぼる像であることは推測しうるが、正統的な作風を示さず、細かな年代比定が難しい。下半身の着衣の制は不動明王像としてはきわめて特異で、盾状の防具を股間に表したり、袴をはくなどの点は、武装天部像にならった表現と見える。甲冑めいた着衣を表したり、また解釈困難な着衣も認められる点から、本像の制作にたずさわった人間が専門の仏師であったか否か、若干の疑義がもたれる。武装天部像ということでは、毘沙門天像の存在が留意され、あるいは同像を参考にしての像容選択であった可能性も考えられよう。毘沙門天像の両沓先が、本像によく似た広葉樹材を用いて造られていることも考慮し、すでに毘沙門天像が存在している状況のもとで、同像を意識しながら造られたのが本像であったと解したい。その時期としては、鎌倉時代後期から室町時代前期までのある段階という憶測にとどめておきたい〔岩田 2013 調書より〕。

岩座に納められていた銅製菩薩懸仏　14 ～ 15 世紀、全長 7.8 ㎝　幅 5.2 ㎝

不動明王立像の岩座の間に納められていた銅製の菩薩懸仏である。線刻もなく簡素な表現だが、蓮華座に結跏趺坐し、右手を下げ、左手は胸の辺りに挙げて、頭には宝冠を表現したのか、連続した縦刻みを入れる。頭頂部は僅かに突出させ、その中心に孔が穿たれている。孔は、両方の手の先と頭頂から真下にあたる足元下面の計四か所に見られる。尊格は今のところ不明である。

④木造僧形神坐像　南北朝時代・貞治 6 年（1367）、像高 30.1 ㎝

いま等妙寺観音堂に安置される尊像である。針葉樹材（ヒノキか）、一木造、内刳なし、彩色、彫眼。木心を像背中央に外した針葉樹の一材より大半を彫成する。内刳は施さない。右手首先､左手第一指、持物（団扇）、各別材製。持物、表面の彩色のすべて、台座、以上後補。左手に持物を執った可能性もあるが確定できない。僧形でありながら頸部に三道を表すことから、単なる肖像ではなく、仏菩薩と習合した尊格と見るべきであろう。天台宗に属する同寺の性格から推して、天台宗総本山比叡山とその末寺の護法神たる日吉山王に含まれる或る神の像かと思われる。像の大半を一材から彫成して内

（正面）

（側面）

（背面）

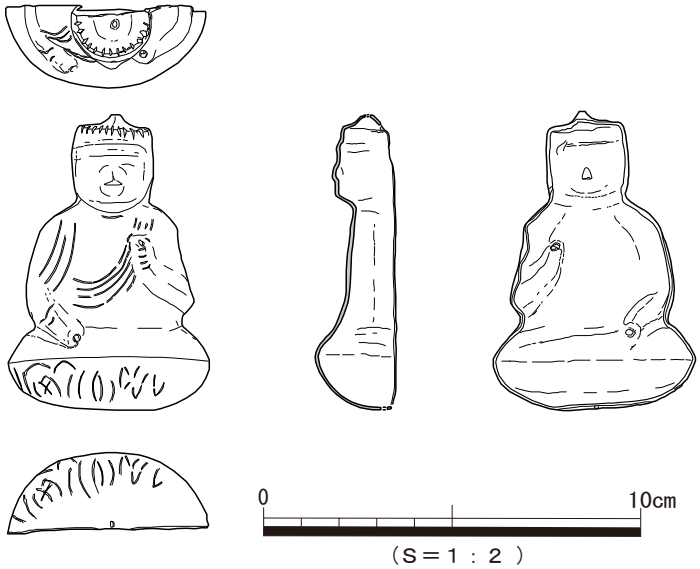
図 3-29　木造毘沙門天立像

（正面）

（側面）

（背面）

図 3-30　木造不動明王立像



（表面）　　（裏面）

図 3-31　銅製菩薩懸仏　実測図及び写真

刳を施さないその構造も、神像彫刻にふさわしい。

滋賀・浄厳院や同・西教寺の山王垂迹曼荼羅を見ると、山王神の中心をなす上七社の像のなかに団扇を手に執る僧形が含まれており、本像はこれと同じ神を表すものと見なされよう。画中の配置から、西教寺本では聖真子と十禅師像、浄厳院本の場合は十禅師像がこれに該当する。その意味において『宇和旧記』に、等妙寺山下に十禅師権現が存したとする記述は注目される。

さて、像底の墨書により、本像は式部法眼祥賢を作者とし、ときの住持興禅によって開眼供養されたことが知られ、貞治６年（1367）旧暦４月 19 日の夜に遷宮、すなわち社殿内に祀られた。残念ながら興禅ないし祥賢については不詳で、等妙寺の寺史のなかに本像を位置づける試みは今後の課題である。ただし、本像の造像は遷宮からさほどさかのぼらない頃と思われ、したがって本像はほぼ貞治６年頃の造像と見てよい。これにより本像は南北朝時代の彫刻史における基準作としての地位を有する。大変貴重なものである〔岩田 2019 調書より〕。

像底墨書

「　勧進　　比丘祐義 / 開眼供養住持沙門興禅 / 作者式部法眼祥賢

貞治六年［丁未］卯月十九日 / 同夜遷宮　」

（正面）　（側面）　（背面）

図 3-32　木造僧形神坐像

（正面）　（側面）　（背面）

図 3-33　木造如意輪観音坐像（東仲等善寺）

⑤木造如意輪観音坐像 室町前期・14 世紀半ば頃、像高 33.9 ㎝

等妙寺開山理玉和尚の隠居寺と伝わる等善寺の髪際高８寸（丈六の 10 分の１の大きさ）、通常の六臂の如意輪観音像である。

江戸時代に施されたと思われる紙貼り泥下地の漆箔が分厚くかかり、彫刻面を鈍く見せているほか、右目や裳先等に害獣ないし害虫による被害があり、保存状態は必ずしも良好ではないが、幸いに像本体に関しては後補の部位が少なく、当初の材を比較的良く残している。

箱を思わせる角形の頭部のかたちや、数を控えた大ぶりで象徴的な衣文を刻む点など、像は顕著な中世院派仏師の作風を示している。像内をうかがうことが可能であれば、院派特有の像心束を刳り残し、また根幹材の前後の割り矧ぎにも束を残して結着する技法が認められるものと思われるが、後補の底板のため今はそれを果たせない。ただし像底の輪郭そのものも、中世の院派作例と共通する前後

に奥行きの深いかたちを呈している。将来的に保存修理が行われ、像が解体される機会があれば、そのような構造・技法が確認されると同時に、年紀や仏師名などに関する銘記が発見される可能性は少なくないだろう。

愛媛県内の院派作例としては、今治市大三島町東円寺の二軀の如来坐像が思い浮かぶ。それらは像内銘によって元徳元年（1330）に院吉によって造立されたことがわかるが、鎌倉時代盛期の余風を残した立体感豊かな造形を示し、本像にみる角張った頭部や写実製を忖度しない衣文の彫法とは径庭がある。一方で、応永 11 年（1404）院慶作の京都・大徳寺釈迦如来像をはじめ、15 世紀に入っての制作と判断される諸像に比べれば、頭・体各部のバランスや自然な姿勢に一日の長を感じさせ、そこからは時代がさかのぼることが推測される。ただし、院派の作例は今のところ 14 世紀も第４四半期のものが少なく、とくに比較したい菩薩像の例に恵まれない。このため今後なお検討・微調整を要するものとは思うが、現在のところ、14 世紀の半ばからこれをやや過ぎた第３四半期の作と推定しておき、将来に期したい。本像の成立が理玉の晩年にさかのぼりうるか、あるいは没後のものとみるべきかは今後の問題としたい〔岩田 2013 調書より〕。

３　仏画の調査

（１）調査経過

調査日程等については以下のとおりである。

【平成 31 年 / 令和元年度（2019）】

調査日：令和元年７月 25 日　　調査場所：等妙寺本堂

調査者：大原嘉豊（京都国立博物館）、幡上・織田（鬼北町教育委員会）

調査対象：等妙寺蔵仏画全般

（２）調査成果

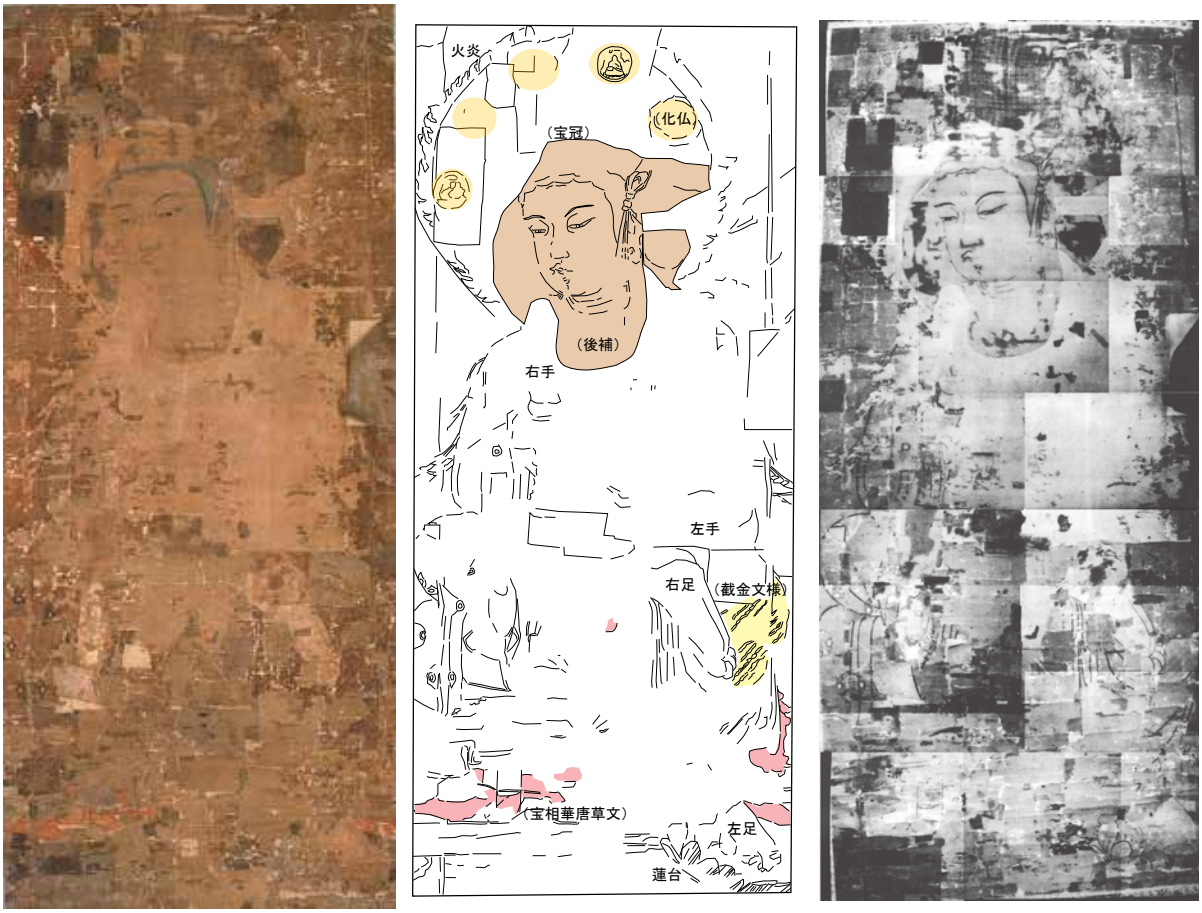
①絹本著色如意輪観音像図 三副一鋪、平安時代・12 世紀、縦 128.0 ㎝　横 56.1 ㎝

この画幅は西田多江氏が詳細な分析を加えて、県下で確認される唯一の平安仏画で、さらに四天王寺本尊式如意輪観音像に基づく極めて特徴的な図像であり、絵画作品としては現存唯一の作例として紹介されている〔西田 2005〕。

制作年代は平安時代末期から鎌倉時代初期、12 世紀後半に遡ると推測され、等妙寺本の特徴をもつ如意輪観音像を図像集の中に求め、平安時代末に心覚によって編まれた密教図像集『別尊雑記』巻第十八如意輪の部に記された「四天王寺救世観音像（如意輪観音）」との共通性から、四天王寺式如意輪観音像の彫像写しの著色画像とし、「太子＝如意輪観音説が文献上確認できる平安末期とほぼ同時期に製作された」もので、「四天王寺式如意輪観音像が彫像のみならず画像にまで波及していたことを物語っている点で、また二臂如意輪観音像を考える上で重要である」と評価されている。

製作地に関して、西田氏は京での制作と見ているが、等妙寺と法勝寺とのつながりに由来するもので、積極的な根拠は見当たらない。また、後醍醐天皇下賜品と伝えられるが、これも後に仮託されたものと考えられる。むしろ、河内周辺の絵師の手による可能性が高いとみられており、聖徳太子信仰の唱導のために四天王寺の絵所で制作された可能性も指摘されている〔山本 2019〕。

旧本尊の如意輪観音像とともに二臂如意輪観音像であり、如意輪観音信仰・聖徳太子信仰の地方波及とあわせ、寺史及びその前史を考えるうえで大変重要かつ貴重な史料といえる。



（トレース図）　　（赤外線投影図）

図 3-34　如意輪観音像図

図 3-35 『別尊雑記』巻第十八如意輪の部
「四天王寺救世観音像（如意輪観音）」

②絹本著色不動明王二童子像図 二副一鋪、鎌倉時代・13 世紀、縦 138.5 ㎝　横 76.5 ㎝

海中の岩座に立つ不動明王、向かって右に矜羯羅童子、左に制多迦童子を配する。不動は、頂部を七莎髻とする蓬髪とし、身色は青黒色とする。面貌部の画絹が群青焼けにより特に剥落・損傷が激しいが、安然の不動十九相観に依拠したものと思われる。右手に三鈷剣、左手に索を執る。腰部両脇から瓔珞を垂下させ、虚空に靡かせるのは、他にあまり類を見ない。体幹部のゆったりした量感に対して手足が細い点も特筆される点で、これらの異例な点は、本図筆者が典拠図像に相当に手を加えて絵画構成を行ったことを示す。それだけに、腕も立っており、筆線にも練達が見られる。着衣は金色を用いず、彩色のみとし、古風な感覚を呈する。但し、火炎光背は、迦楼羅炎とせず、通常の火炎の描写となっている。

矜羯羅童子は、肉色身とし右手は垂下させ白蓮華を執り、左手は屈臂して胸前で独鈷杵を執る。蓬髪は金泥で描き起こす。制多迦童子は、右手に木杖を執り垂下させ、左手は右肩の条帛を軽くつまむ。この両童子の図像については、矜羯羅童子は、不動図巻（重要文化財、京都・醍醐寺蔵）中の不動御頭并二使者像と一致する。一方、制多迦童子は、これと一致せず、不動明王二童子像図像（滋賀・石山寺蔵）と近い姿勢をとる。醍醐寺本図像には「飛鳥寺玄朝筆」との墨書注記があり、石山寺本図像にも「以玄朝様　帥上座図之」とある。玄朝とは、10 世紀末に活動が確認される絵仏師で、奈良・飛鳥寺によって活動したことから「飛鳥寺玄朝」と称された。ちなみに、「帥上座」とは 12 世紀に活躍が知られる絵仏師、定智を指す。本図は、玄朝様（玄朝のスタイル）に若干のアレンジを加えたものと言え、そのアレンジも本図筆者が独自に行ったものであると思われる。

上記の様式的特徴、及び画絹も比較的目が詰まっていることから、13 世紀後半の作と見られる。相当に腕の立つ絵仏師の作であり、制作地も京都近辺に求められる可能性が高い。

本図は、『宇和旧記』に「一不動絵　後鳥羽院勅筆と云」とあり、更に箱底納入紙片墨書には「不動明王　伝［後鳥羽院御筆／後醍醐天皇恩賜品］」と、後醍醐院下賜との伝承も付加されている。後者については、南北朝時代の等妙寺中興に併せて仮託されたのであろう。

なお、他幅に添っている安永６年（1777）宇和島藩第五代藩主伊達村候（1725-1794）による修理銘貼紙が本図には添っていないが、『宇和旧記』に「一　郡主より絵像七幅表具寄進」との記載から、本来は本図にも添うべきものである〔大原 2020 調書より〕。

③絹本著色両界曼荼羅図 各三副一鋪、室町時代・天文 18 年（1549）

（金剛）縦 140.8 ㎝　横 127.8 ㎝、（胎蔵）縦 140.8 ㎝　横 127.4 ㎝

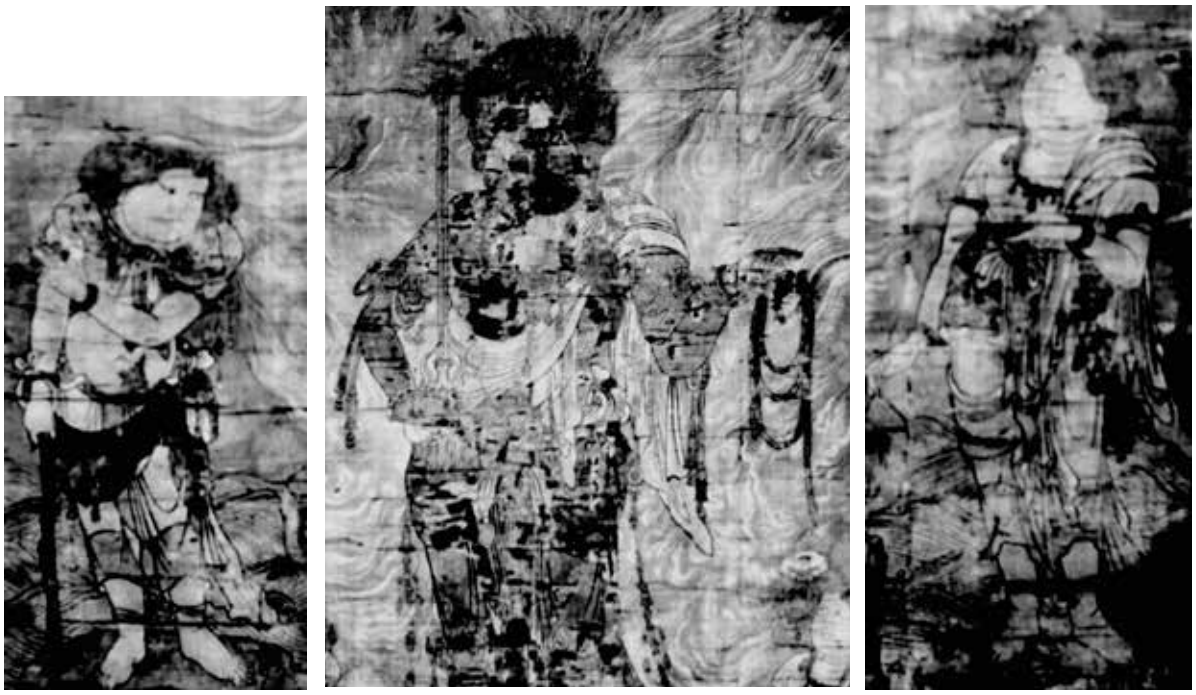
両界曼荼羅とは胎蔵、金剛界の両界からなり、各々『大日経』、『金剛頂経』に依拠し、密教の世界観を示すものである。

本図で注目されるのは、金剛界が慈覚大師円仁請来の八十一尊曼荼羅と称されるものである点で、これは真言宗で用いられる通常の九会曼荼羅から中央の成身会のみを抽出したものである。八十一の諸尊で構成されることからこの名があり、中央の５つの月輪中の五智如来及び各四親近菩薩が、鳥獣座に坐す点に大きな特徴がある。中国でも不空の系譜を引く地域には、関連する遺品が散見される。根津美術館に鎌倉時代の転写本が所蔵されており、その軸裏書から同図が近江・金剛輪寺灌頂堂に伝来し、円仁請来本を写したことが知られている。

周知のように、『大日経』、『金剛頂経』は本来は別個に成立したもので、それが中国に伝来した過程で教理的な統合がなされ両界曼荼羅とされるに至った。それを成し遂げたのが、弘法大師空海が師

（赤外線投影図）

図 3-36　不動明王二童子像図



（矜羯羅童子）　（不動明王）　（制多迦童子）

図 3-37　赤外線投影図部分拡大

事した恵果であった。日本天台宗の開祖、伝教大師最澄は、空海と共に遣唐使に随行したが、天台教学の研鑽を唐留学中の主目的としており、密教の受法は付随的なものであり、長安での恵果正系の密教の受法ではなかった。そのため、金剛界曼荼羅の請来もなかった。台密では、この点における真言宗に対する劣勢を認識しており、金剛界曼荼羅の請来は悲願であった。それを果たしたのが円仁であり、長安で金剛界曼荼羅を得た晩、今は亡き師、最澄が夢に現れ、涙ながらに喜び、円仁を礼拝したという記事が、円仁在唐の記録である『入唐求法巡礼行記』開成５年（840）10 月 29 日条に見える。円仁は、真言宗に対抗する意味もあり、特にこのような九会曼荼羅と異なる図像を求め、広めようとしたのであろう。

さて、本図は、図像的には、正統なものである。しかしながら、細部にはやや粗略な点が認められる。例えば、胎蔵曼荼羅中台八葉院の大日如来の頸飾が頸後ろに繋がっていない点、大日如来及び四仏の頭光の模様や大日如来向かって右の開敷華王如来の右腕の短縮法の破綻は、写し崩れというべきもので、プロポーションにもやや歪みがある。諸尊面部が横に広く、螺髪が扁平になっている点は、中国の元もしくは明時代の様式の影響と見られる。

また、彩色も、簡略化されている。基本的に、如来形・菩薩形の肉身は、金を使用しない黄色身か白肉身及び肉色身で、暈かしもほとんど入れられておらず、肉身線や他の描き起こし線も墨線描き起こしが大半で、白肉身には朱線描き起こしもある。頸飾等の装身具は金泥とし、胎蔵曼荼羅中台八葉院の三鈷杵や華瓶あるいは四門等の面積の広い金色箇所は裏箔、一方、金剛界曼荼羅の界に置かれた三鈷杵や最外院の三摩耶形は表箔である。両部とも界線は截金とするが、金の発色は鈍い感覚がある。諸尊着衣にはほとんど彩色模様を置かず、胎蔵大日の裙等に金泥模様が置かれる程度である。また、壇場地は、群青、緑青無地とし、截金模様を置いた痕跡は認められない。また、諸尊台座蓮弁の花脈も表現しない。

彩色の配色原理は、紺丹緑紫という伝統的なものに依拠しており、着衣等もその組み合わせを適切に用いている。繧繝彩色は三段（濃・淡・白）程度の簡単なものである。紫は、濃色系統は紫土（酸化鉄）、淡色系統は褪色著しいことから有機系の染料を使用したかと思われる。なお、顔料は、発色があまり良くなく、総じて質が必ずしも高いと言えない。基本的に表彩色を基調とし、彩色後線描を描き起こすが、一部に裏箔を用いていることは指摘の通りである。但し、絹目が粗いことから、目地止めとして黄土等で全面に裏彩色が行われている可能性が高い。なお、壇場地の群青等の剥落箇所に補彩が一部あるが、全体的に制作当初の彩色をよく保全している。

図像の細部に緩い点があり、様式的にも時代の降下が考えられる点から、制作年代は 15 世紀後半になるものと推測される。

なお、『宇和旧記』に同寺現存什宝大半の基礎となる記載があり、本図の由緒も記載されている。重要なので、以下に引用する。

「一　両界曼陀羅　此両様開田善覚禅門寄進、建武元年甲戌七月料足百廿貫之価入となり。右曼陀羅修復再興して裏書有、其写、『為有間前雲州太守淳応能公禅定門奉再興寄進智光院者也、当時檀那今城左衛門尉能光（書判）、時之住持受昌、奉行光住備後守義真、天文十八年己酉八月吉日』」

要約すると、建武元年（1334）７月、開田善覚が京都において代価 120 貫で購求のうえ等妙寺に寄進し、次いで、天文 18 年(1549)に今城左衛門尉能光が有間前雲州太守淳応能公禅定門のために再興し、

金剛界（八十一尊曼荼羅）

胎蔵界

図 3-38　絹本著色両界曼荼羅図

等妙寺塔頭智光院に寄進した、となる。

『宇和旧記』の前段の記載は、その具体性から、然るべき古記録に拠ったものと思われ、史実を反映していると推測される。それが現存する本図に附会されたものと見られるが、本図はその制作年代から見て『宇和旧記』記載の開田善覚寄進本には該当しないと判断される。

しかしながら、後段の記載は、惜しくもその後の修復の際に失われたと見られる本図旧軸裏書という一次史料に基づいており、信頼性は極めて高い。『宇和旧記』ではこの文中の「再興」を修復と解釈するが、これは文字通り新写本の制作と判断して良いであろう。原本破損に伴い、原本保存のために副本が制作されることは、建徳元年（1370）の「玉垂宮縁起」（重要文化財、福岡・玉垂宮蔵）のように、この当時もあったからである。すなわち、同図の箱蓋表裏には「草創之昔雖有画像之縁起、依令破損、憑貴賤合力、所令書改也依状如件」とある通りである。上述のように、様式から推定される本図制作年代は、天文 18 年（1549）と時期的に極めて近接する。

よって、本図は、今城能光によって開田善覚寄進本に基づく新写本として制作され、等妙寺塔頭智光院に寄進された、と判断して支障ないものと思われる。ことに、本図の呈する様式感覚は、京都や南都と異なっており、『宇和旧記』記載旧軸裏書銘の示すように、当地に制作地を求め得る可能性が極めて高い点は甚だ貴重であり、地方作として積極的な意味を見出すべき作と思われる〔大原 2020 調書より〕。

④絹本著色授戒本尊図　一副一鋪、室町時代・15 世紀、縦 115.9 ㎝　横 58.3 ㎝

釈迦如来を中心に、六聖を配する、授戒本尊図、戒壇釈迦図、もしくは授戒三聖図等と称される図である。比叡山延暦寺戒壇院安置の釈迦如来像、及び僧形の文殊・弥勒菩薩像を描いたものである。この尊格の組み合わせは、最澄が『顕戒論』において、荊渓湛然『授菩薩戒儀』に依拠して、『観普賢菩薩行法経』に基づく大乗菩薩戒の授戒形式を創出したことに端を発する。釈尊を和尚とし、文殊菩薩を羯磨師、弥勒菩薩を教授師とし、十方諸仏を証明師とし、十方諸菩薩を同学等侶とするもので、釈迦の左右の日輪・月輪は、十方諸仏・十方諸菩薩をそれぞれ表し、上部の左右の宝珠は、諸大師及び延暦寺の鎮守である山王神を表す。

等妙寺は、元応２年（1320）に、京都・法勝寺で円頓戒を復興した恵鎮（円観、1281-1356）の孫弟子、理玉和尚の中興にかかり、法勝寺の遠国四カ戒場（鎌倉宝戒寺・加賀薬師寺・伊予等妙寺・筑紫鎮弘寺）の一つとして中世後期に重きをなした歴史がある。本図は、まさにその由緒を伝えるもので、重授戒灌頂で用いられたものである。法勝寺は、応仁の乱後は衰微し、天正 18 年（1590）に近江・西教寺に併合されたため、法勝寺の寺宝の一部は西教寺に遺存し、本図と同一図像の南北朝時代の「戒壇釈迦図（授戒本尊図）」が伝わっており、彩色も類似している。

釈迦如来は、蓮華座上に結跏趺坐するが足先は着衣で隠れている。右手は屈臂して胸前に構え、第一・三指を捻じ、左手は垂下し、第一・三指を捻じる。螺髪・肉髻は扁平で、大きな肉髻珠を表し、群青を塗り込め、髪際に緑青を置く。眉・鬚も群青に緑青を添わせる。肉髻の盛り上がりが浅く扁平で、朱で肉髻朱を大きく表すのは、中国・元・明時代以降に顕著になる中国様式の反映で、時代相を示す。肉身は金泥塗込、着衣部は、丹具地（現状、白茶色）に截金で模様を置く、皆金色身とする。大衣の条部は、丹具を下地にして菊唐草文截金文を置き、田相部は雷文繋截金文を置く。覆肩衣は、表地の縁は波文、地を格子文、裏地を網目文とし、いずれも截金とする。裙は、覆肩衣に覆われ、表現されていない。

台座は、下から華足、白群の反花座を挟み六角下框座二段、宝幢で上框座を支え、内に獅子を配した六角敷茄子座、六角上框座二段とし、上框上段天面は水面とし、そこから伸びた緑蓮華座とする。緑蓮華は截金で縁取り、花脈も截金を置いている。

また、二重円光を負う。頭光は、内円圏を群青無地とし蓮華を中央に配し、金色の縁帯を巡らし、外円圏を緑青無地とし六化仏を配し、群青地に金色二重円文を配した縁帯を巡らす。身光も同様の表現であり、外円圏の化仏も六体である。周縁は宝相華文舟形光背とし、九体の化仏を配する。光背の金色部分は、全て精緻な金泥の盛り上げ彩色となっている。画面下部に二僧形を表し、向かって右が文殊、左が弥勒で、釈迦と併せて受戒三聖と称することは既述の通りである。

文殊菩薩は、椅子上に坐し、七条袈裟・横被をまとい、右手は屈臂し構え、第一・三指を捻じ、左手は垂下して差し伸べ、仰掌する。肉身は白肉身とし、描き起こし線に朱を沿わせる。袍は、白緑無地とし、袖先に丹の縁を入れる。七条袈裟は、条部は金泥で蓮華唐草文を置いた群青地、田相は茶褐色に青緑の斑を入れて刺し目を表す糞掃衣とする。横被は、朱地に金泥で渦文を散らし、金泥で輪宝三鈷杵繋文を描いた黒地の縁を巡らす。

弥勒菩薩は、椅子上に坐し、七条袈裟・横被をまとい、右手は屈臂し胸前で構え、第一・三指を捻じ、左手は屈臂して差し伸べ、伏掌し、第二指で前方を指す。肉身は白肉身とし、描き起こし線に朱を沿わせる。袍は、白緑無地とし、袖先に金泥で雷文を施した朱の縁を入れる。七条袈裟は、条部は青緑の寒色を用いた蜀錦文、田相は四ツ目入格子文の白綾地とし遠山文を配した所謂遠山袈裟とする。横

被は、丹地に白で蜀錦文を置き、青緑の蓮華団花文散らしとし、金泥で唐草文を描いた群青地の縁を巡らす。

この両脇侍像の衣の表現は、西教寺本に依拠するとは言え、舶載染織品を正確に写しており、当代の染織に対する好尚をよく示すと同時に、日中交易の状況をある程度反映したものと言え、制作年代に関する示唆を与えてくれるものである。

次いで、釈迦の両脇、向かって左には白雲上に月輪を安ずる。月輪内には紅蓮華座を描く。右には、白雲上に白蓮華座を配し、座上に日輪を安ずる。日輪は裏箔である。

更に、上部に移り、向かって右上隅には、格狭間に獅子を表した礼盤上に繧繝縁の畳を敷き三弁宝珠を安んじ、背障を立てる。三弁宝珠は裏箔とし、朱の暈かしを火炎部分に入れるが、火炎と分からないほど概念的な描写となっている。背障は三曲屏風で、金泥で唐草文を描いた朱の軟錦を縁に巡らし、四ツ目入格子文を表した白綾地に緑青で遠山文を配している。左上隅には、格狭間に獅子を表した礼盤上に高麗縁の畳を敷き月輪内に紅蓮華座を置き白色の宝珠を安んじ、椅背を立てる。

本図は、群青等の質が極めて高く、明度の高い稠密な表彩色を基調とした描写は特に精緻を極める。特に、主尊光背、台座金具、等に見られる金泥盛り上げ彩色の精度の高さは特筆される。よって、本図は、法勝寺との由縁に鑑みて、京都の作と見なしてよいと判断される。

図 3-39　絹本著色授戒本尊図

釈迦の肉髻の表現や、両脇侍の正確な舶載染織品再現は、これが 15 世紀以降の日明貿易の進展の産物であることを示すが、撚りに若干のむらがあるが、細い比較的目の詰まった画絹の様子や描写の精緻さから、あまり時代を降らせて考えてはいけないものである。

よって、本図の制作年代は、15 世紀半ばと判断される。授戒本尊図の遺品の中でも、屈指の古作で、由緒と照らして歴史的意義も極めて高い、希有の作品であると言えよう〔大原 2020 調書より〕。

⑤絹本著色釈迦十六善神像図　一副一鋪、室町時代・15 世紀、縦 119.5 ㎝　横 58.5 ㎝

『大般若経』六百巻を転読する大般若会の本尊として用いられたもので、釈迦三尊を中心に大般若経守護の十六善神及び常啼・法涌の二菩薩、下部に玄奘及び深沙大将を描く。上部は白群地の虚空とし、天蓋を配し、釈迦の背後は涌雲とする。下部は壇場とし、緑青地に截金で格子文を置く。

釈迦如来は、右手を屈臂して掌を前に向ける施無畏印、左手は腹前で仰掌し、蓮華座上に結跏趺坐する。肉髻の盛り上がりが浅く扁平で、朱で肉髻朱を大きく表すのは、中国・元・明時代以降に顕著になる中国様式の反映で、時代相を示す。髪際に群青を添わせる。肉身は金泥塗込、着衣部は、丹具地に截金、金泥で模様を描く、皆金色身とする。大衣の条部は、丹具を下地にして金泥盛り上げとした渦文とし、田相部は截金で卍字崩文を置く。覆肩衣は、表地の縁は波文、地を麻葉繋文、裏地を網目文とし、いずれも截金とする。裙は、縁を亀甲繋文、地を格子文とし、截金とする。台座は、涌雲の上に、下から下框座、格狭間、中框座、火灯窓形の狭間から獅子をのぞかせた六角敷茄子座、青蓮華の反花座、六角上框座（周囲を鉄囲山とし内部を海水とする）、上框座海水中から伸びた緑蓮華座とする。緑蓮華は截金で縁取り、花脈も截金を置いていたと考えられるが、緑青と共にほとんど剥落している。また、二重円光を負い、頭光は緑青無地、身光は白群無地とし、周縁には何も付さないが、これも時代の下降を示唆する要素である。

釈迦向かって右に騎象普賢菩薩、左に騎獅文殊菩薩を脇侍として配する。文殊は如意を両手で執り、肉身は皆金色身とし、着衣部は釈迦同様とする。天冠や装身具、如意は、丹（橙色）を下地に盛り上げ金泥で仕上げる盛り上げ彩色とするが、発色を良くするため丹を原色で使用するのは、時代の降下を示唆する。獅子は、白群の体毛に鬣などを緑で彩色する。普賢菩薩は、白肉身とし、開敷蓮華を両手で執り、蓮華上には梵夾を置く。その他の彩色技法は文殊とほぼ共通する。両脇侍の持物は、本来逆で、図像に対する認識が崩れており、これも時代の降下を示唆する要素である。両脇侍の手前内側向かって右に女人形で左手に紅蓮華を執り、右手を与願印とする常啼菩薩、左に僧形合掌の法涌菩薩を配する。常啼菩薩の手前に、笈を負って合掌する玄奘三蔵、法涌菩薩の手前に深沙大将を配する。これは、『大般若経』を請来・訳出した玄奘のインド取経説話に依拠している。画面下部に四天王を配し、主尊周囲にこの四天王を含む十六善神像を配する。

絹の目が粗く、裏彩色が活躍している点、色彩の対比が明快である点、14 世紀後半以降顕著になる金泥の盛上彩色が活用されており、かつ金の下地色を赤系統とし発色を良くする工夫、及び図像に対する認識が曖昧になっている点などから、制作年代は

図 3-40　絹本著色釈迦十六善神像図

15 世紀末葉になるものと推測される。白群部分を除く彩色の原色による明晰な感覚は、京都よりは南都に近い感覚があるが、それとも異なっており、あるいは瀬戸内海近辺の先進地に制作地を求めた方がよいのかもしれない。図像認識の誤解なども、地方作ゆえの情報として扱うべきかもしれない。

なお、本図は、『宇和旧記』に記される同寺什宝のうち「一　十六善神絵唐筆」に該当し、「唐筆」との記述には本図の中国趣味が鑑識として反映されている〔大原 2020 調書より〕。

⑥地蔵菩薩二童子像図　三幅一対、紙本墨画淡彩、江戸時代・17 ～ 18 世紀、縦 97.2 ㎝　横 43.2 ㎝

海中の岩座に坐す延命地蔵菩薩と、その侍者である掌善童子・掌悪童子を岩座上に立つ姿で表したものである。

地蔵菩薩は、瀧の流れる岩座上に、右足を踏み下げる形で安坐し、右手に錫杖を執り、左手は胸前で仰掌し宝珠を執る。右幅の掌善童子は両手で白蓮華を執り、左幅の掌悪童子は、右手に木杖を執り、左手は右手甲に臂をつき、顎を支える姿で表される。この掌善童子・掌悪童子の図像は一般的なものであるが、これら両脇侍が不動明王の二侍者である矜羯羅童子、制多迦童子に各々なぞらえて日本で創案されたことを如実に物語っている。全幅に同一の朱文方印が捺されており、一具のものとして伝来したと見てよい。

本図に関しては、『宇和旧記』に「一　地蔵絵三幅一対　等香筆と云ふ」とあり、更に後段で「一郡主より絵像七幅表具寄進、所謂七幅は、観音、不動、十六善神、受戒本尊、地蔵三幅一対也、但此地蔵絵は、津島満願寺より天文廿二年寄進の書付有り」との記載をまず参考にすべきであるが、管見の限り、どうしても江戸時代以前に制作年代を遡らせることに困難を覚えざるを得ない。「等香筆」についても不詳であり、落款の印章とは齟齬するのではないかと思われる。よって、本図制作年代については、後考に委ねたい〔大原 2020 調書より〕。

掌悪童子

延命地蔵菩薩

掌善童子

図 3-41　地蔵菩薩二童子像図

⑦絹本著色慈恵大師像図　一副一鋪、江戸時代・元禄 14 年（1701）、縦 143.0 ㎝　横 100.0 ㎝

天台宗全盛期をもたらした第 18 代天台座主・慈恵大師良源（912-985）を描いた図である。描表装とし、上部に金泥で草花を描いた白・白群・朽葉色の色替わりの色紙形を置き、墨書で賛が記される。上部に帷帳を張り、背障の前に格狭間に獅子を表した礼盤上に坐す良源を大写し、礼盤前に二童子を侍者として配する。慈恵大師像としては、正統的な図像である。

描表装は、総縁を海老茶地に輪宝文散印金、中・風帯を浅黄地に牡丹作土文印金とする。このような印金裂、特に中・風袋に用いられた牡丹作土文に類した文様は、桃山時代から江戸時代前期に表装裂として特に好まれたもので、本図と同様な描表装の類例や現物から確認される。精緻な絹地に表から丁寧な彩色が施されているため、経年劣化で彩色の剥落がやや目立つが、背障の画絹欠失箇所に一部補筆がある他は、制作当初の姿をよく伝えている。

賛文は「敬礼慈恵大僧正、天台仏法擁護者、示現最勝将軍身、悪業衆生同利益、元禄十四年七月、二品良応親王謹書　（朱文方印）「釈円□」」とあり、本図の制作年代がこれで判明する。賛者の「二品良応親王」とは、後西天皇第 11 皇子、第 192 代天台座主の良応法親王（1678-1708）のことである。

加えて、『宇和島領寺院帳』（愛媛県立図書館蔵）等妙寺条下には、本図の由緒が記されている。その要旨は、良応法親王が描かせ、東叡山学頭前大僧正義道の開眼になると言う。等妙寺は近世において比叡山延暦寺東塔北谷惣持房末となっていたが、元禄 13 年（1700）に宇和島藩三代藩主伊達宗贇の願により江戸東叡山寛永寺直末寺となっており、これを機に本山から下付されたものであろう。ただし、本図軸裏には、天保６年（1835）の金剛山大隆寺（宇和島市）第 15 世・晦巌による由来記が墨書されており、本図が元禄４年（1691）に伊達宗相（1697-1709、幼名兵五郎、宇和島藩主伊達宗贇世嗣）により寄附されたとあるが、生没年の齟齬からも、これは元禄 14 年の誤記と思われる。

さらに、本図を納めた箱（杉薬籠蓋）蓋表の墨書から、筆者が判明する点も重要である。この箱には「御絵所宗庭拝図」とあり、制作当初のものと思われるが、この「宗庭」とは、幕府御用絵仏師でもあり、寛永寺絵所の御用絵仏師、神田宗庭のことである。この場合は、第２代神田宗庭宗房（元禄 15 年９月 10 日没）を指す。日光輪王寺他関東圏に遺品が散見されるが、関西での確認はあまり進んでおらず、本図はその貴重な遺品というだけでなく、作行きの優秀性からも彼の最晩年の代表作の一つとして特筆される〔大原 2020 調書より〕。

図 3-42　絹本著色慈恵大師像図

軸裏墨書

「等妙寺所蔵慈恵大師像元禄四年　伊達兵五郎君所寄附也寛文十一年安永六年　官修補共有記焉／天保二年春執政松根某検径界至寺拝膽宝具傷此像之蟲損於是　官重命褙装十有二月褙成焉明年癸／巳夏大旱寺主令賢対像修如意輪供期七日祈雨第七日午時雷雨俄起霧霈三日／太守賞嘉其懇誠四民感像之霊験甲午春予偶至拝仏像曼荼羅等寺古在其東南之渓上今杉林翳／天土人呼古寺山云嗚呼仏法陵夷南海之戒壇鐘磬寂寥残僧数輩羯羯磨之筵篇聚之旨邈不可復聞矣／躊躇不覚涙従之頼有斯数物之存覧昔時之万一令賢請表褙年時及祈雨之応於幀背因併感慨而書／天保六年乙未孟春之吉

住金窟晦巌道人（朱文方印二顆）」

箱蓋表墨書

「慈恵大師尊像［一幅］　御絵所宗庭拝図」

（３）仏画修理等の履歴

『宇和旧記』には、天正 15 年（1587）戸田勝隆宇和郡入部の折に、等妙寺は寺領すべて没収され、翌年の天正 16 年（1588）天火によって 12 坊ことごとく焼失した、と記載されている。したがって、現存の中世に遡る寺宝は、没収あるいは散逸していたか、焼失を逃れた遺品が集積されたものである。このことについても『宇和旧記』では、宇和島藩初代藩主伊達秀宗世嗣・伊達宗時（1615-1653）が等妙寺に参詣して古寺山に登り、等妙寺縁起を披見して、散逸した寺宝を収集したとされている。宗時は、寛永 15 年（1638）に父・秀宗に代わり宇和島に入り、実質的な藩主として政務にあたった。慶安３年（1650 年）から宗時は健康を害するようになり、承応２年（1653）に死去、第２代藩主を宗利（1635-1709）が襲封した。したがって、宗時が寺宝を収集した時期は、寛永年間の終わり頃とみてよいであろう。『宇和旧記』には、その後の寛文 11 年（1671）に宗利の修理事績について記載があり、「一　郡主より絵像七幅表具寄進」とある。現在剥落してしまっているが、軸裏の貼紙墨書にて、安永６年（1777）宇和島藩第五代藩主伊達村候（1725-1794）による修理銘が遺されており、宗利の修理についても記されている。この絵像七幅は、「如意輪観音像」一幅、「不動明王二童子像」一幅、「釈迦十六善神像」一幅、「授戒本尊図」一幅、「地蔵二童子像」三幅対に該当する。また、『宇和旧記』に記される什宝記載と現存寺宝とはよく照合出来る点から、この記載は信頼できるものといえる。

軸裏貼紙墨書

「従四位拾遺遠州太守藤原朝臣宗利君寛文十一辛亥春二月命櫻田主水祐親／善修補焉至今茲安永六丁酉年歴一百七年悉蟲損矣於是复六月／従四位拾遺遠州太守藤原朝臣村候君重命有司装潢復功矣（白文方印）」

４　その他の調査

『宇和旧記』の什物目録には、先の仏画以外に「仏舎利二粒」、「牛玉」、「鹿玉」、「四面仏具」、「華鬘十二」が記されている。このうち、「華鬘」は現在までに失われてしまったようで、「四面仏具」についてもはっきりしない。これら以外にも寺宝と伝えられ、これまでの調査から中世に遡る可能性があるものや寺史を語るうえで欠かせないものも含まれており、それらを中心に報告する。

①什器類・密教法具

堆朱香合　木造漆塗彫漆、明代後期・16 世紀、総高 5.1cm　身高 4.2cm　口径 14.4 cm

蓋の天井面、側面と、身の側面は堆朱、身の蓋受部は黒漆地の上に朱漆塗り、蓋内面と身の内面、外底をややうるんだ色調を呈する黒漆塗りとする。蓋天井面は、地に細かな七宝繋ぎ文（中は麻の葉文）をごく薄肉の彫漆で表す。花は牡丹ともみられるが､葉は切り込みがなく芍薬の葉に近い。蕊は、一方が菊花様、一方が細かな七宝様で表される。一枝に花を大きく二房、蕾を二房表し、枝と葉をつける。蓋・身とも、胴側面は、七宝繋ぎを大きく割り付けた文様（中は十字文）を表す。

これらは、灰色の粗い下地に黄漆を塗った上に朱漆を厚く塗り重ね、間に薄い黒漆層（緑漆の可能性もある）を挟んで、その上に文様を彫刻刀で深く彫り込む。彫漆断面には、漆を塗り重ねた層が明瞭に観察できる。花弁や葉の表面には、朱漆の階調差による縞を見ることができる。弁脈と葉脈は、先が細く鋭い彫刻刀で彫り付けており、その技量は精緻である。堆朱部の下には、薄茶色の砥粉とみられる下地が観察できる。黒漆塗りの下地には、灰褐色のごく薄い下地が施されるのみで、薄い塗膜に粗い断文と、剥離部分が認められる。蓋天井裏面の断文が放射状に走るのに対して、身底の内外面の断文は、木目方向に平行に走る。身受け部の口縁端部に修理による朱漆を若干認める。

細かな地文を広くとり、大ぶりな花弁文を表す図様、朱漆層を厚くとり、薄い黒漆層を挟む作風、灰色の粗い下地処理を行うことなど、本作は中国・明時代後期に製作されたものとみなされる〔久保氏の教示による〕。

密教法具（金剛杵）　室町～江戸・16 ～ 17 世紀、（独鈷）全長 10.5 cm（三鈷）全長 12.0 cm（五鈷）全長 11.5 cm

等妙寺に伝わる密教法具金剛杵の独鈷杵・三鈷杵・五鈷杵である。元禄 11 年（1698）銘の什物箱にて保管される。真鍮製であるが、作行に技巧性、細密化が顕著な江戸期のものに比べ、やや粗い作りで、室町の作風を留めている〔久保氏の教示による〕。

図 3-43　堆朱香合

図 3-44　金剛杵

図 3-45　仏舎利二粒を納めた舎利塔

図 3-46　牛玉・鹿玉と伝わる玉類

図 3-47　守本尊

仏舎利塔と合わせて「曽我兄弟寄附」とされる。

②　鬼王段三郎・曽我伝承に関わる遺品

『等妙寺縁起』は江戸初期成立とされ、等妙寺が山麓に移り、新たに比叡山延暦寺惣持坊の末寺として歩み始めた頃か、あるいはその後に等妙寺の歴史（縁起）を残す必要から記されたものと分析されている〔石野 2011〕。その冒頭に記された開基伝承は、日本三大仇討で有名な曽我兄弟とその従者鬼王段三郎、開山理玉和尚の物語となっている。『宇和旧記』はこの縁起を元にしており、什物目録にある「仏舎利二粒」、「牛玉」、「鹿玉」が今に伝わるが、はっきりした年代は不明である。

曽我兄弟の伝承は、宇和郡だけでなく、喜多郡や高知県西部にも広がる。これらの唱導には、時衆聖や高野聖、熊野修験者らが関わったというが、曽我伝承をもって等妙寺の開基が語られる理由やその時期については定かになっていない。いずれにしても伝承・伝説は在家の人々が紡ぎ伝えてきたもので、寺院活動を支えた人々の思想や信仰が反映されているものと考えられる。

③等妙寺山下の施設「十禅師宮」に関わる品

日吉神社蔵木造山王扁額　木製扁額、額裏面墨書銘、文化６年（1809）、縦 76.0cm　横 41.0 cm

鬼北町大字芝の等妙寺境内に隣接する日吉神社に掲げられている山王扁額である。

裏面に、文化６年（1809）、等妙寺住持であった実相院性海の手による墨書銘が記されており、明治の神仏分離以前、等妙寺の鎮守社として再建された山王社（十禅師宮）の遷宮時に掲げられたものであることが判る。明治以前の神仏習合を伝え、十禅師を祀った中世等妙寺より続く寺史の中に位置づけられるべき貴重な遺品である。

扁額裏面墨書銘

「此神ハ七社第六十禅師権現也 / 是地神第三瓊瓊杵尊之御 / 拵向也　■■■■■也
文化己巳年十月吉辰法印権大僧都実相院性海　」

等妙寺蔵宮殿　室町後期・16 世紀、高さ 135.0 ㎝　幅 108.0 ㎝　奥行 53.0 ㎝

等妙寺の観音堂内に安置されている宮殿である。入母屋造で屋根はこけら葺、正面の扉は欠損するものの、側面の一部が開くようになっており、折り戸であったことが判る。中にもう一つ宮殿を備えた二重構造を呈しており、群青を塗った瑞雲の彫刻に柱を載せ、空に浮かぶ宮殿を表現している。柱の上部は牡丹唐草文の彫刻が施され、左右一対の「阿吽」象が彫刻される。屋根まで含めて全体にベンガラが塗布されており、極めて珍しい。上部には牡丹唐草模様の彫刻が施されている。空に浮かぶ二重構造の宮殿という形態から推測すると、瑞雲に乗って現れる如来、あるいは天から降臨する神格をもつ尊像が納められていたと推測される。蛙股の形状や彫刻の特徴からみて、室町時代後期の作と見られる〔三浦正幸氏の教示による〕。

この宮殿に関しては等妙寺観音堂内で保管されてきたが、由来について記した文献等もなく、不明と言わざるを得ない。同じく観音堂内に保管されていた僧形神坐像（十禅師権現）は、十禅師宮の本尊として祀られていたもので、神仏分離の際に、日吉神社から等妙寺に戻されたと考えられる。これらは観音堂内にて別々に安置されていたが、神像と神格を祀る宮殿が同一場所に保管されている現状から、これらを組合わせてみたとき、大きさ、彩色などがよく一致していることが判る。僧形神坐像の表面の彩色、台座はすべて後補によるものである。高さの点にアンバランスさがあるが、現状の台座がすべてであったかも定かでなく、１段下の台座があれば一致するようにも思われる。断定はできないが、本来一具であった可能性が高いものと考えられる。

④その他の遺品

香色法衣　室町時代・16 世紀、（法衣上）幅 200 ㎝　丈 120 ㎝　（法衣上）幅 116 ㎝　丈 86 ㎝

黄緞七条袈裟及び座具　明時代後期・16 世紀　（七条袈裟）縦 112 ㎝　横 254 ㎝　（座具）　縦 78.8 ㎝　横 104.3 ㎝

後醍醐天皇賜下品として等妙寺に伝わる香色法衣、黄緞七条袈裟及び座具である。

香色法衣は、上下別の褊衫、裙子からなる。上下どちらも経糸、緯糸ともに絹糸の平織りで柔らかく軽い。下は八枚剥ぎで５つのタックをとって仕立てられる。中世期のものであるが、明確な年代はつかめていない。

七条袈裟は、地と条の部分とで生地が異なる。地は経緯絹で精錬されず撚りもほとんどない生糸で織られている。組織は綾織りで入子菱模様、色は黄色で天然染料によるものと見られる。条の部分は経がきわめて細い絹糸で、緯は木綿の糸と銀糸で織られ、雲に交互に向かい合わせた鳳凰の模様が見

（赤外線投影図）

図 3-48　日吉神社蔵「山王扁額」

図 3-49　等妙寺蔵宮殿

図 3-50　僧形神像（十禅師権現）との組み合わせ

てとれる。全体的に地の破損が著しく、条は色褪せ、銀糸は銀が剥がれ落ちているが、非常に繊細な作りで軽い。象牙製の環が付いている。座具も縁の部分が袈裟の条の部分と同じで、中心部分は麻による平織りである。

この袈裟と座具は、絹と木綿の交織織物で、いわゆる黄緞と呼ばれるものである。黄緞は、一般に経糸に細い絹糸、地緯に木綿糸、絵緯に絹糸・金糸・銀糸を用いた少し厚手の織物で、日本での生産は確認されておらず、中国元・明からの舶載品とされる。本品は、明代後期頃のものと推測される。

これらについては、後醍醐天皇賜下品と伝わるものであるが、香色法衣は不明ながらも、黄緞七条袈裟及び座具は年代的に合わないため、後世の仮託によるものといえる。現在調査中であるが、黄緞七条袈裟に環が付くタイプは禅僧が着用するものという。香色法衣、黄緞七条袈裟及び座具のどちらも制作年代は中世期に遡るものであり、資料的価値が高いことには疑いないが、寺への来歴については慎重に判断していくことが必要である。調査を待って報告することとしたい。

図 3-51　香色法衣

図 3-52　座具

図 3-53　黄緞七条袈裟

図 3-54　七条袈裟の丈の模様

図 3-55　七条袈裟の環

５　調査成果のまとめ

等妙寺に伝わる什物を、仏像・仏画・その他の什宝に分け、個別の調査成果について説明してきた。ここでは調査所見をもとに、寺史への位置づけについて検討してみたい。

まず、等妙寺の什物の調査所見から得られた年代観と文献等から判明している寺史を対比したものが、以下の表である（表 3-14）。理玉和尚により開山されたと伝わる元応２年（1320）から大火により焼失する天正16年(1588)、そこから鎌田正秀の尽力により霊光庵跡地にて再興する天正18年(1590)

表 3-14　等妙寺什宝と寺史対比表

西暦	等妙寺什物調査所見	寺史関係
	・木造毘沙門天立像（11 世紀末～ 12 世紀初） ・如意輪観音像図（12 世紀末～ 13 世紀初）	
1200		
	・木造菩薩坐像（伝如意輪観音）（13 世紀第 2 四半期） ・不動明王二童子像図（13 世紀後半）	
1300		
	・木造不動明王立像（14 ～ 15 世紀） ・等善寺木造如意輪観音像（14 世紀後半） ・僧形神坐像（十禅師権現）（貞治 6 年（1367））	1320　等妙寺開山（法地開山） 1330　理玉、立間大光寺で開田善覚に遭う。本堂・方丈、十二坊造営。 1356-57　開山理玉和尚死去 1367　十禅師宮遷宮 1377　法勝寺の災禍により扶助料足を負担
1400		
	・授戒本尊図（15 世紀半ば） ・釈迦十六善神像図（15 世紀末）	1427　宗秀、法勝寺静能の本願で本尊磐座修理を行う。 1453　歯長寺昌宗と立花津の寺領地をめぐり争う。
1500		
	・両界曼荼羅（天文 18 年（1549））	1511　智相、野村三島大明神遷宮 1534　紹円大徳、理玉忌の華鬘を造る。 1540　法勝寺周見、等妙寺方丈にて台密秘書「護摩私記」を書写する。 1549　今城能光、開田善覚寄進両界曼荼羅を修復し塔頭智光院へ寄進。 1553　津島満願寺、地蔵絵三幅対寄進。 1580　旭栄、松森村三島大明神遷宮 1583　芝一覚、観音厨子再造する。 1587　戸田勝隆、寺領を没収。 1588　天火により十二坊焼失。
		1590　鎌田正秀、霊光庵跡地にて再興。 1594　本堂再建
1600		
		1638-50　伊達宗時、寺宝を収集 1671　二代藩主伊達宗利、仏画七幅修理
1700		
	・慈恵大師像図（元禄 14 年（1701）） ・地蔵菩薩二童子像図（17 ～ 18 世紀）※	1700　東叡山寛永寺の直末寺となる 1777　五代藩主伊達村候、仏画修復

以降という大きな画期がある。制作年代についてはともかく、それぞれの什宝がいつの段階で入手され、どこに置かれていたか、またどのように使われたかを寺史の上で明らかにしていく必要がある。そこで、（１）制作年代が元応２年（1320）を遡るものを開山以前、（２）開山以降より焼失までの間を旧等妙寺段階、（３）山の下にて再興され、江戸時代を主体とする時期のものを現等妙寺段階として整理する。

（１）開山以前

什宝のうち、最も古い制作年代であるのが毘沙門天立像で、平安後期の 11 世紀末～ 12 世紀初頭とされる。次いで、二臂如意輪観音を描いた如意輪観音像図が 12 世紀後半、旧等妙寺本尊である二臂の菩薩坐像（伝如意輪観音）が鎌倉前期の 13 世紀前半（第２四半期）とされる。後醍醐天皇賜下品と伝わる不動明王二童子像図は 13 世紀後半の作と見られている。

毘沙門天立像について岩田氏は、造りや細部の造作から、「この地方における制作」としており、前史の頃から受け継がれたものである可能性が高く、等妙寺開山後に脇侍として祀られたと見られている。このことについては、（２）にて触れる。

如意輪観音像図と菩薩坐像（伝如意輪観音）については二臂如意輪観音であり、どちらもその制作年代は等妙寺の開山期を遡っており、結論から言えば、前史の頃から等妙寺に受け継がれてきたものとみられる。

如意輪観音像図は正確な来歴は判らないが、『宇和旧記』の「一、観音絵聖徳太子御勅筆」に該当し、旧等妙寺で所有していたのは確かであろう。本図は、いわゆる四天王寺式如意輪観音を描いた現存唯一の著色画像とされ、西田氏は等妙寺の聖徳太子信仰や如意輪観音信仰の表れであると指摘する〔西田 2005〕。また、この仏画の成立背景には、12 世紀に聖徳太子と如意輪観音が同体とみる説が関わり、真言宗・醍醐寺僧が大きく関わる中で四天王寺周辺で成立するという〔山本 2019〕。菩薩坐像（伝如意輪観音）についても同様に二臂像であり、二臂如意輪観音をめぐっては仏教美術や日本仏教史で研究が進められている〔清水 2012 等〕。

また、第２分冊第５章の久保論文において記されているように、如意顕院跡（平坦部Ａ）の庭園と観音堂跡（平坦部Ａ－２）の発掘調査からは、開山以前の遺構の存在が確認され、本尊菩薩坐像（伝如意輪観音）は観音堂に安置されていた可能性が高まった。このことは、理玉和尚は中興開山であり、それ以前の院政期から鎌倉期にかけて、聖徳太子信仰・如意輪観音信仰を基盤とする観音霊場が形成されていたことを示している。また、奈良山の詳細分布調査においても大師ヶ森（太子ヶ杜）や六角堂といった関連地名・地点が検出され、所属時期の特定には至っていないが、遺構の存在も確認されている。つまりは、等妙寺をも含めた奈良山の歴史を示す遺品としても注目されるのである。

不動明王二童子像図は 13 世紀後半の作で、大原氏は京都で描かれたものと評価されている。信憑性はないが、後醍醐天皇賜下品であっても年代的には齟齬はない。ただ、等妙寺前史に伴うものかどうかは今後の検討が必要である。

（２）旧等妙寺段階

本尊脇侍の木造不動明王立像、『吉田古記』に理玉の隠居寺ないし遷化所と伝わる等善寺の木造如意輪観音像、貞治６年（1367）銘が記された木造僧形神坐像（十禅師権現）が 14 世紀代のものとみられる。

『等妙寺縁起（文化元年本)』には、開田善覚が理玉一行が在京の折に 110 貫文で買い求めた「灌頂用四面仏具」､「両界曼荼羅」などが記されている。『宇和旧記』には､建武元年（1334）７月とあるので、この頃のものとみられる。灌頂用四面仏具とは、灌頂、つまりは重授戒灌頂や授戒の際に用いられる法具類のことで、大壇に並べられた四面器、香炉、水瓶、金剛杵などの密教法具類を指すものと思われる。『宇和旧記』に「一　四面仏具」とあるため、少なくとも江戸初期には伝わっていた可能性があるが、現在は不明である。今伝わっている金剛杵は、室町後期まで遡る可能性はあるが、それ以前のものとはいえず、失われてしまった可能性が高い。

「両界曼荼羅」については大原氏の所見にあるように、天文 18 年（1549）今城能光によって開田善覚寄進本に基づく新写本として制作され、等妙寺塔頭智光院に寄進されたものとみられる。特に金剛界八十一尊曼荼羅は天台特有の図とされ、現存数も少なく貴重な品とされる。大原氏が「地方作として積極的な意味を見出すべき作」と評するように、寺史の上でも明確に位置づけられる一品である。

さて、不動明王立像については、岩田氏の所見において重要な指摘がなされている。それは、毘沙門天立像と一具（セット）とするために不動明王像が造像された、とみられることである。つまり、不動明王像が造像された時期がその成立時期を示すとみてよく、その年代観からすれば、旧等妙寺の頃はすでに一具で祀られていた可能性が高いと判断される。

現在、等妙寺観音堂で祀られている三尊は、本尊菩薩像（伝如意輪観音)、左脇侍が毘沙門天立像、右脇侍に不動明王立像である。岩田氏によれば、主尊を観音とし、不動明王と毘沙門天を脇侍とする三尊像は、第三代天台座主となった慈覚大師円仁の感得（神仏や真理を悟ること）により、比叡山横川中堂に聖観音・不動明王・毘沙門天を安置したことに始まるものとされ、天台系の三尊といわれる。また､横川は天台修験の聖地ともいわれ､比叡山の山岳修験の聖地葛川明王院の三尊（12 世紀）など、天台修験との関わりが示唆されるという〔山本 2016〕。

先に触れたように、平坦部Ａの庭園と観音堂跡（平坦部Ａ－２）の発掘調査から、本尊菩薩像は観音堂に安置されていた可能性が高まった。また、平坦部Ａの調査では、平場全体で火災に遭った形跡が認められたのに対して、推定観音堂とする方三間の建物跡はその形跡がなく、天正 16 年（1588）の焼失を免れていたと推測される結果が得られた。このことは、麓に移される以前も三尊形式で祀られ､なおかつその成立時期は 14 世紀代の可能性がある。天台系の三尊に見立て祀られた時期とすれば、理玉らによる等妙寺中興開山の時期が想定される。状況証拠を重ねたに過ぎないが、現地の情報と照らし合わせることで、より具体的な様相に迫れるものと考えられる。今後、さらに検証を進めていく必要がある。

等善寺の木造如意輪観音像については、 14 世紀後半の京都院派仏師の作とみられており、理玉和尚と関係を有するものである。宇和荘内に広がる等妙寺の末寺のいくつかに如意輪観音を祀る寺が散見される。西予市城川町魚成の長善寺もその一つで、地方仏師により南北朝期造像とされる六臂の木造如意輪観音像が伝わっている。これらは、理玉らの等妙寺開山以降の如意輪観音信仰の系譜に連なるものと理解され〔山本 2019〕、二臂像ではなく、六臂像であることには注目される。

次に、貞治６年（1367）銘が記された木造僧形神坐像（十禅師権現）は、極めて重要である。『等妙寺縁起』や『宇和旧記』には山下に置かれた施設として「十禅師権現」との記述がみえるが、これは天台宗比叡山の護法神「日吉山王神」の神のことである。現地等を含めて調査した結果､中世の「十禅師宮」の存在や、それが理玉が所属した「戒家」の思想・信仰に基づくものであることが判明してきた。本像はまさにその「十禅師宮」の本尊で、その遷宮の年月日までもが明記されており、寺院造

営を知るうえで大変貴重な成果となった。

天台宗比叡山の護法神である日吉山王神は、大宮（西本宮）と二宮（東本宮）を中核とし、聖真子を加えて山王三聖、さらに八王子・客人・十禅師・三宮を加えて上七社という。黒谷流戒家はその思想において、十禅師神を特に重視したという研究がある〔舩田 2009、山本 2020〕。戒律寺院としての造営における戒家の思想の反映を物語るものであり、寺史を解明するうえでも非常に重要な手掛かりが得られたといえる。

さて、密教と授戒とを融合した戒家特有の儀礼である灌頂（重授戒灌頂）の際の荘厳道具一式はほぼ失われてしまったようであるが、本尊の授戒本尊図は大切に遺されてきた。本図は 15 世紀半ばの作と判断され、大原氏は「授戒本尊図の遺品の中でも、屈指の古作で、由緒と照らして歴史的意義も極めて高い、希有の作品」と評価されている。寺史に照らし合わせると、応永 34 年（1427）本尊磐座修理や享徳２年（1453）の歯長寺との寺領争いがあった頃で、前住等妙寺で法勝寺第 21 世の紹空上人（静能）の支援があった時期と推測される。等妙寺の開山期には灌頂用四面仏具等が取り揃えられており、当然ながら本尊の授戒本尊図はなくてはならないが、本図はこれに該当しない。初代が何らかの理由で失われ、15 世紀半ばに新調する必要があったと解される。今回報告する平坦部Ａの発掘調査において、旧本堂ＳＢ０１から新本堂ＳＢ０２の建て替えや平場全体の再整備を行ったことが判明したが、その画期は 15 世紀半ばから後半にかけての時期であり、旧本堂ＳＢ０１は火災により焼失した可能性も示唆されている。いずれにしても法勝寺流を継ぐ正当な図像であり、寺史を語るうえで欠かせないものである。

釈迦十六善神像図について、大原氏は 15 世紀末葉と推測され、地方作の可能性が高いものと評価されている。また、地蔵菩薩二童子像図については、『宇和旧記』に「津島満願寺より天文廿二年寄進の書付有り」との記載があるが、「寄進の書付」は現在伝わっておらず、大原氏の鑑定にあるように本図は寄進本とは一致しない可能性が高い。

（３）現等妙寺段階

16 世紀代の所産と見られるものは、「堆朱香合」、「黄緞七条袈裟及び座具」などがある。また、「香色法衣」は中世のものではあるが、年代観がはっきりしない。『等妙寺縁起』に戒師のみが着用を許された「香法衣」との記述があり、これに該当する可能性がある。

このほか、『等妙寺縁起』の曽我伝承・鬼王段三郎にまつわる遺品があるが、年代的には不明である。これは、先に触れた「金剛杵」も含めて、元禄 11 年（1698）等妙寺 30 世慈心院恵海のときに造られた什宝箱に納められ、現等妙寺に伝わっている。それぞれは中世まで遡る可能性はあるものの、元禄 11 年（1698）にまとめられた段階を基準にみておいた方が良い。

等妙寺は、第３代宇和島藩主伊達宗贇の推挙によって元禄 13 年(1700)に東叡山寛永寺の末寺となっており、恵海一代に限り木蘭色の衣着用を勅許されるなど、寛永寺末の住職として別格の処遇を受けたという。恵海は、元三大師への信仰が篤かったといわれ、宝永２年（1705）寛永寺の元三大師会に参列した記録などがある（伊達家文書「記録抜書」）。慈恵大師像図はこの時のもので、その由来も明確である。

文政２年（1819）に等妙寺住職冷湛（36 世か）が記した『等妙寺建立勧化帳』には、当時の境内の建物等の様子が描かれ、おおよその来歴を窺い知ることができる。現在、等妙寺境内に隣接する日吉神社に伝わる「山王扁額」は、文化６年（1809）実相院性海の手による墨書銘が記されており、明

治の神仏分離以前の、等妙寺の鎮守社として再建された山王社（十禅師宮）の遷宮時に掲げられたものである。明治以前の神仏習合を伝え、十禅師を祀った中世等妙寺より続く寺史の中に位置づけられるべき貴重な遺品といえる。

【参考・引用文献】

石野弥栄 2010「付編　等妙寺関係主要文献史料解説」『史跡等妙寺旧境内保存管理計画策定報告書』鬼北町教育委員会

石野弥栄 2011「「等妙寺縁起」の成立とその背景」『よど』西南四国歴史文化論叢 12 号

岩田茂樹 2015「木造菩薩（伝如意輪観音）遊戯坐像」『國華』第 1435 号

鬼北町教育委員会 2007『等妙寺旧境内（第１～９次調査)』第８集

鬼北町教育委員会 2020『奈良山等妙寺の至宝と国史跡等妙寺旧境内展』等妙寺開基 700 年記念　鬼北町・愛媛県歴史文化博物館共催テーマ展図録

色井秀譲 1989『戒灌頂の入門的研究』東方出版

清水紀枝 2012「院政期真言密教をめぐる如意輪観音の造像と信仰」（早稲田大学博士論文）

寺井良宣 1998「法勝寺流円戒の旧跡「伊予等妙寺」と西教寺「戒灌頂」の授戒本尊」『真盛宗報』第 125 号

西田多江 2005「作品紹介 等妙寺蔵 絹本着色如意輪観音像」『愛媛県美術館研究紀要』第４号

舩田淳一 2009「中世叡山律僧の神祇信仰について－本覚思想との関係から－」『日本思想史学』41 号

山本義孝 2016『「奈良山」の構造と世界観を読み解く』講演会資料　鬼北町教育委員会

山本義孝 2019『奈良山に展開した如意輪観音信仰・聖徳太子信仰』講演会資料　鬼北町教育委員会

山本義孝 2020『山王神道と戒家の十禅師信仰』講演会資料　鬼北町教育委員会